

大御宝

——日本型ウエルビーイングの理念——

伊勢 雅臣

高橋…伊勢先生はNPO法人歴史人物学習館理事長、経営学博士でございます。先生、よろしくお願いいたします。

伊勢…ただ今、ご紹介いただきました伊勢雅臣です。よろしくお願いたします。本日は、「大御宝—日本型ウエルビーイングの理念—」ということで、大層なタイトルを付けさせていただきました。でも、私自身、ウエルビーイングというのはあまり分かっていませんが、日本の歴史の中でウエルビーイングが最も実現されたのでは、という時代が幕末の日本ですので、その頃を少し振り返って、そこからそういう社会がどうやって出てきたのかという形でお話しさせていただきたいと思えます。

まず、幕末に開国してから西洋人がたくさんやって来ます。

その西洋人たちが、幕末の日本を見てみんなびっくりするので。例えば、初代の米国駐日公使のタウンゼント・ハリス。この人が伊豆半島の下田で公使館を構えて、こんなことを述べてます。

「彼らはみな、よく肥え、身なりも良く、幸福そうである。一見したところ、富者も貧者もない。これが恐らく人民の本当の姿というものだろう。」

明治初年の頃に撮られた写真を見ますと、確かにみんな、よく肥えていて、あんまり物質的には豊かでもないのですけども、非常に幸福そうで、富者も貧者もない。これが恐らく人民の本当の姿というものだろうと言っているのです。ハリスは駐日公使になる前に、インド、中国、東南アジアで商人をしていたので、当時の欧米世界とアジアの状況を身をもって知ってい

たのです。そして、当時の諸外国と比べて、こう言っています。

「私は質素と正直の黄金時代を、いずれの国におけるよりも多く、日本において見いだす。生命と財産の安全、全般の人々の質素と満足は、現在の日本の顕著な姿であるように思われる。」

これは、当時の人々の観察だけではなく、現代にスーザー・ハンレーという日本史の研究者がいますが、この人も、こういうふうに言っています。

「二八五〇年に、（伊勢注・幕末の時点で）住む場所を選ばなくてはならないのなら、私が裕福であるならばイギリスに（伊勢注・世界帝国をつくっていたイギリスの貴族階級ですから）、労働者階級であれば日本に住みたいと思う。」

こういう結論を本人が出しています。このスーザー・ハンレーは、当時の日本の平均寿命は西ヨーロッパよりも長かったということを、いくつかのサンプルで示しています。例えば、西ヨーロッパの平均寿命は三十五歳から四十歳。これに比べて、岡山の藤戸村という所は男四十一歳、女四十五歳。愛知県の方村では男三十五歳、女五十五歳。だいたい男女差が開いてますけども、平均しますと大体、四十数歳ということで、西ヨーロッパよりも平均寿命は長かった。ということは、それだけ良い生活をしていたということです。

スーザー・ハンレーは、その原因の一つとして、優れた公衆衛生があったと言っております。

「十七世紀中頃から十九世紀中頃にかけて、（伊勢注・江戸時代）、首都の公衆衛生は給水の量についても、ごみ処理についても、日本のほうが西洋よりも上であって、その結果、人口規模や死亡率からしても都市の住民にとつて、さらに健康的な住環境になっていたことは、まず間違いない。行政当局が都市での公衆衛生の水準を設定し維持するのに大きな役割を果たしたのである。」

この政策の一つが、玉川上水です。江戸は、海に近い低湿地帯で井戸を掘っても塩水しか出ないということで、深刻な水不足で暴動まで起きていたのです。人口が三十万人ぐらいのときに、もう手いっぱいでした。それを江戸幕府は、これでは駄目だということで、神奈川県と東京都の間を流れる玉川から、四十キロ以上もの上水道を作って、江戸市中に飲める水を引いたのです。これは当時、世界最大級の上水道です。こういう上水道があつて、江戸で百万人住めるようになり、世界最大の都市になったということです。こういう政策を、江戸幕府は結構、真面目にやっていたのです。

江戸時代は歴史で飢饉だとか一揆だとかという暗いことばかり教わっていますけど、経済史の研究が進んでいます。例えば、江戸の時代の前半期は非常に高度成長なのです。人口が江

戸幕府が成立したときは千五百万人ぐらいたったのが、一七〇〇年代の前半で一番多いときは三千万を超えています。ですから、百五十年で二倍になった。耕地面積も二百万町から三百万町ということで、非常に開拓が進みました。それから面積が大きくなっただけではなくて農耕技術も進みました。これだけの人口を養えるに足る農産物が得られたということなのです。

ところが、江戸時代後半から、地球が寒冷化してきまして、日本列島の収容人口が大体三千万人ぐらいたと考えると考えられませんが、それに達したところで、非常に寒冷的な気候になってしまつて、三大飢饉が襲つてきました。また合わせて、浅間山やアイスランドの火山が噴火しまして、大気圏が火山灰で覆われて、日光があまり差さなくなりました。この影響でフランス革命も起きるわけですけども、この後半は、江戸の日本は人口抑制と生産性向上により生活の充実に努めて、西洋よりも長い平均寿命を達成したということが歴史的な事実であります。

もう一つは、世界断トツの教育水準があります。当時の就学率の国際比較がありますけども、幕末の江戸での就学率は寺子屋なども含めて七〇から八六パーセント。イギリスの大工業都市が一八三七年で二〇から二五パーセント。ソ連に至つては一九二〇年になつても二〇パーセントです。欧州では貴族や大商人、軍人などしか、文字の勉強はできなかったのです。それに對して、江戸では、七、八割の子供たちが勉強していました。

これを見て、幕末に來日した西洋人が驚いています。これは、エルベ号というプロシア海軍軍艦の艦長がこういふふうに書いています。

「日本では召し使い女が互いに、親しい友達に手紙を書くために余暇を利用し、ぼろをまとつた肉体労働者でも読み書きができることで、われわれを驚かす。」

ヨーロッパでは、召し使い女が字を読み書きできるとか、ぼろをまとつた労働者が字を読めるなどというのは信じられない光景だったわけです。そういう光景が日本では頻繁にあるということ、びっくりしてるのです。

「われわれが観察したところによれば、読み書きが全然できない者は全体の一パーセントに過ぎない。世界の他のどの国が、自国について、このようなことを主張できようか」

というところで、国民全体をなるべく教育するということに関しては、当時の世界でも断トツの水準を達成していたということが言えるかと思えます。

それから、我が国の歴史教育では、江戸時代は百姓一揆ばかり起こつていて、農民階級が搾取されていたというような教育が長い間、行われてましたけども、最近の研究者は、かなり実証的な研究で、それが事実ではないということを示しています。

例えば、一揆の掟というのがありまして、田畑を荒らさな

い、役人に不敬を働かない、けんか騒ぎを起こさない、火の元を嚴重にする、酒は無用。江戸時代に起きた千四百三十件の一揆を全部、調べた人がいまして、この中で役人が殺害されたの是一件しかない。一揆で農民が鍬や鋤を持っているといかにも武装しているように見えますけども、鍬や鋤は百姓のシンボルで、「われわれ百姓だから戦うために来たんじゃないんだ」「自分たちが百姓身分を逸脱してない」というアピールです。この百姓一揆というのは、実は階級闘争ではなくて集団交渉でした。領主に対して、もっといい政治をしてくれとか、この辺をもう少し考えてくれ、そういう集団交渉であったということも明らかになってきています。

それは、当時の常識として「百姓成立^{ひびくしやうなりたち}」という考え方があったのです。これは武士は為政者階級として、百姓がちゃんと生活できるようにする責任がある。そういう良い政治をするのが武士の責任であって、百姓はそれに感謝して年貢をきちんと納めるべきだ、という前提があったわけです。ですから、武士の政治がちゃんとしてなくて、こういうふうにしてくれということを集団交渉するときに、一揆が起きていたということが明らかにできています。江戸幕府の方針自体に、この百姓成立という概念があったのです。

実は、徳川家康が將軍になって最初に出した法令が、郷村法^{ごうそん}令で、藩の横暴、不正に対しては幕府の代官や奉行所へ届け出

た上で直目安を出してよい。直目安というのは將軍である家康への直接の訴状です。幕府の直轄地ではなくて、何々藩の領地で、その藩の横暴とか、不正があったら、その近くの幕府の代官や奉行所に届けた上で、將軍に直訴状を出していいということとです。いわば、これは内部告発です。しかし直轄領で、例えば幕府代官が悪いこととしてたら、そんな届けもなしに、直接、將軍に出せ、こういう法令を出してるのです。

また江戸幕府は、まっとうな政治をしてない藩に対しては、ものすごく厳しくて、例えば、会津藩主で加藤明成という人がいました。この人が年貢率を引き上げたり、無地高といって土地もないのに税の石高だけ押しつけるということをやったわけです。そこに寛永十九年、凶作があつて、百姓二千人が逃散しました。百姓たちが隣の藩に逃げ込むのです。そして隣の藩が幕府にご注進をして、会津藩では百姓が食うにも食えずに、こんなに私たちの所に流れ込んできましたということを、また告発するわけです。加藤氏は翌年、改易になって領地没収、領主失格であるということになったわけです。

その反対が米沢藩の上杉家でありまして、藩内の経済開発に努めて、天明の大飢饉で例年の三割ほどに米作が落ち込んで備蓄米を活用して、死者を一人も出さず、他藩から流れ込んできた難民がたくさんいたんですけども、そういう人たちも救ったということで、これは美政であるとして幕府は三回も表彰を

しています。このように、江戸幕府は各藩内の統治に関して、悪いところはビシビシ潰す、いいところは褒めるということで、非常に厳しく統治をしていたことが分かります。こういう政治が、どういう考えから出てきたかということをとどけていくと、結局は最初の天皇である神武天皇まで行き着くのです。

例えば、江戸幕府がこういう幸せな社会をつくったというのは、徳川家康の政治からですけども、その家康の前が秀吉です。その前が織田信長。この三英傑が非常に尊王家でして、天皇の民を大切にするといい祈りを何とか実現しようということ、戦国時代からの戦乱を取めて、この三代でこういう幸せな国をつくったというのが日本の歴史の本質である、というふうには私を考えます。

その始まりが神武天皇の即位で、『日本書紀』の中に記録がありますけども、このとき神武天皇はこういうふうに言われています。

「つし恭みてたかみくら寶位に臨みて、おのみたから二元元を鎮むべし」(謹んで皇位に就いて、民を安んじ治めなければならぬ)。

この元とはもともと漢字では人体を表していて、元元というのとは単なる人々という意味なのですけども、これを『日本書紀』では「おのみたから」と訓じているわけです。それからその続きで、「皇孫すめみまの正ただしきを養ひたまひし心を弘めむ」と。皇孫にんぎょのみこと瓊瓊杵尊が正義を育成された御心を広めていこうと。これにつ

いては、もう少し後で説明します。それから、「八紘はちこうを掩おおひて宇いへと為なむこと、亦また可よからずや」。八紘をおおいて、わが家とするのは、はなはだ良いことではないか。これが日本軍国主義のスローガンだというようなことを言われてますけども、それがとんでもない誤解であるということは、この後でお話しします。『日本書紀』では、民を表すいろいろな言葉が使われています。人民、衆庶、百姓、民萌、民。これらは全て、例外なく、「おのみたから」と訓じられています。平安時代からは、『日本書紀』が貴族の政治の教科書として使われていましたから、当時の為政者たちは全て、民が大御宝なのだという前提で、政治をしなければならぬということを教わっていたということが考えられます。

次に、この「八紘を掩ひて宇と為む」ということですけども、これはネアンデルタール人と比較すると、今の人類の本質に則った理想であることがよく分かります。ネアンデルタール人は数万年前まで欧州などに住んでいました。頭蓋骨を見ると、脳が現生人類よりも大きいのです。体格も非常に立派で、脳も体も現生人類より大きかったのに、氷河期を生き延びられずに絶滅してしまっただけ。なぜ、われわれ、脳も小さいし体も弱い現生人類と同じ氷河期を生き延びられたのかという原因は明確になつてまして、ネアンデルタール人は、家族程度の共同体しかつくれなかつたのです。それに対して、現生人類は何十家

族、何百家族というような家族が協力する大きな共同体をつくりました。これが一番大きな違いだというふうに言われてます。この多人数で力を合わせると、例えばマンモスをみんなで倒して獲物をとることができた。ネアンデルタール人は核家族ですから、父親一人で獲物を取らなければいけない。そうすると、こんな大きな獲物は取れないわけです。また、狩りをしてる途中で事故で死んでしまったら、その妻も子どもも飢え死にしてしまうのです。こうすると、核家族というのは非常に弱いわけです。それに対して、何百家族も集まっている現生人類は、例えばマンモスに一人やられても、その残った奥さんと子どもは周りの人が助けて、それで生き延びることが出来る。

それと、もう一つ大きな違いは、狩りの工夫などを一人がすると、それを共同体全体で広めて使うことができるということです。ネアンデルタール人は何万年たつても、技術進歩がなかったということが分かってます。それに対して現生人類は、例えば矢尻の形がどんどん変わっていくとか、非常に技術進歩があるわけです。これは、やはり大きな共同体の中で、知恵を集積できるから、進歩ができるわけです。そういうことで、思いやりに基づく協力が、人類の生存と協力を築いたということが言われています。すなわち人間というのは、共同体の中で力を合わせて生きる存在なのだと、これが大事な人間観なのです。ですから「八紘を掩ひて宇と為む」というのは、一つの国

内でまとまって、一つの家のような共同体をつくらうということとで、人間の本性をそのまま生かした国家観であるわけです。

それから、もう一つ、「皇孫の正を養ひたまひし心を弘めむ」。皇孫というのは天照大御神の孫です。天照大御神は、コメとかムギとかアワとかヒエとかの五穀を見つけられたときに、これらが地上の民が食べて生きていくものと大変、喜ばれ、自ら高天原に田を作って、ご自身で育てられたのです。その稲穂を自分の孫である瓊瓊杵尊（にぎのきみこと）に授けて、これを持って地上に下って人民を養えと、命ぜられたわけです。その瓊瓊杵尊が地上に下りて、その周囲の人々の正しい心を広めていったのです。

この中で、私はこの「正」というのは、利他心のことを言っているのではないかと思うのです。これは、現代の心理学でも、人間は他者の感情に共感する能力を持っていて、他者の喜怒哀楽をわが事のように感ずると言われています。例えば、電車の中で自分が座って、前にお年寄りが立っていると、お年寄りのつらい思いが自分にも伝わってきます。ミラーニューロンというメカニズムがあるということが分かっているわけです。この他者の苦しみ、悲しみを自分も共感し、あるいは他者を喜ばせたいという気持ちがり利他心であって、この利他心は、進化の過程で共同体の中で互いに助け合うために獲得した能力である、と言われています。お互いがお互いのことを思う利他心がないと、共同体は維持できないのです。そういう利他心を養お

うとしたのが、この詔なのではないかと、私は考えています。さらに、この考えを深められたのが、聖徳太子の十七条憲法であると考えられます。『和を以て貴としと為す』。この和は、単に仲良くしようということではなくて、この第一条の結論部分は、こう書いてあります。

「上和らぎ下睦びて、事を論らふことに諧ふときは、事理自ずからに通ふ。何事か成らざらん」（上下の者が和み、睦み合ひ、事を論じて、合意に至れば、事の道理は自然に通る。何事であれ、成就しないものはない）。

例えば、クラブ活動とかクラスで、今度こんな行事をするのどうしようと、みなで、わいわい、がやがや意見を言います。そのときに、非常に和やかに話をしてると、これがいいんじゃないかと、それよりこちらのほうがいいとか、そういう形で、どんどんアイデアが出てきて、結果的に自分一人では思いつかないような、いい結論にたどり着きます。それが今どきの政治みたいに、野党と与党がいかに相手を叩くかというようなことで議論しても、それでは新しい発見にはつながらないわけです。その辺りを言っているのが、この十七条憲法の第一条です。

そのベースに「共にこれ凡夫」という人間観があります。第十条には、こういうふうにあります。

「人、みな、心があり、心にはそれぞれの考えがある。共に

凡夫なのである。是非のことわりを一体、誰が定めることができようか」。

現代の学者で、ハーバード・サイモンという人がいまして、ゲームの理論などで有名な人ですけども、限定合理性という概念を主張しています。経済主体は合理的であろうと意図しても、認識能力の限界によって限られた合理性しか持ち得ない。人間の理性というのは限られてるということです。ですから、逆に共産主義社会で計画経済のほうがいいんだなどというのは理性万能の考え方であって、それが誤りであることは歴史が示しています。理性が限定的であるからこそ、お互いに和やかな議論で、共に創造性を発揮していくのだ、というのが、聖徳太子の指摘なのです。これによって、各自が他の人が言ったことで、自分の考えの偏向とか限界に気付いたりとか、あるいは独善的な革命や独裁を避けるということで、集合知というのは個人知の足し算じゃなくて掛け算になる。人間は周知を集めることで、より高い英知に至るのだという人間観が、ここにあるかと思えます。

それから、さらに時代が下って、もう一つ大事なポイントとして、明治天皇の五箇条の御誓文の一項にこうあります。

「官武一途庶民ニ至ル迄、各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス」。

官吏や士族は言うに及ばず。当時の為政者というのは大体、

官吏とか士族ということでしたけども、庶民に至るまで、それぞれが志を持って、希望を失わないように生きるべきだと。それが近代国家をつくる上で、非常に大事なんだと明治天皇は言われたわけです。

明治天皇は御誓文と同時に、国民にお手紙を發せられまして、その中にこういう一節があります。

「天下億兆一人も其所を得ざるときは、皆朕が罪なれば」(全ての国民が一人でも、『其所を得』られないときは、みな、私の罪である)。

この『所を得』るといのは、一人一人が持っている様々な能力、才能、適性を生かすような形で、国家が運営されなければいけないということを、明治天皇が神に誓われたわけです。

この『所を得』るといのは、マズローの欲求五段階説とか、よく理解できると思われま。この欲求五段階説とは、人間はまず生理的欲求、すなわち飲み、食い、睡眠などの欲求があります。それが満たされると次に安全の欲求が出てきます。それが満たされると、今度は所属の欲求が出てきます。家族に属するとか共同体に属する。さらに、それが充足されると、今度は承認の欲求。共同体の中で、他のメンバーから認められたという気持ちです。最後が、自己実現ということ自分で自身能力を最高度に發揮したいってことなわけですけども、この所属、承認、自己実現というあたりが、一人一人が『所を

得』るとい言葉に対応するのでは、と私は考えています。

伝教法師、最澄は『一隅を照らす、此れ則ち国の宝なり』と言いました。たとえば、一本のろうそくは、それぞれ小さな一隅しか照らせませんが、たくさんろうそくが集まれば、部屋全体も明るくなる。しかし、その一本のろうそくがないがために、一つの暗がりが出てきてしまいます。ですから、この『一隅を照らす』そういう国民が国の宝だということです。これは大御宝とも言えるでしょう。そういう意味で、一人一人が自己実現を図り、その『所を得』て共同体のために尽くすことが幸せへの道なのです。

この幸せという言葉は、よく考えますと実に味わいの深い言葉です。幸という漢字は、「手かせ」を示す象形文字なのです。確かに執行とか報復とか蟄居とか、罰に関連するの言葉に、「幸」の字が使われています。これは、中国では非常に罰が厳しくて、すぐ死刑とか手足を切断する刑にされてしまう、そこまで行かずに、手かせで済んだというのが非常な幸運であるという考えらしいのです。

それから、英語では happy と言います。これは happen と同じ語源で、たまたま起こったという意味です。ですから、自分の努力ではなくて転がり込んだ幸運というニュアンスがあるのです。

それに対して、「仕合わせ」というのはどうかというと、「仕

とは「する」ことです。仕事、仕組み、仕分け、仕返し、仕打ちと、仕というのは「する」という意味です。したがって仕合わせというのは、することが合わさっているということですから、互いの主体的な思いやりからの行為が合わさって、もたらされる状態だということです。共同体の中で、お互いが他者のために思いやりを持って、それが合わさると幸せの状態になるのだというのが、日本語でのわれわれの先人たちの考え方だったようです。

実は、日本の神話でも、そもそもの初めから、そういう光景が描かれています。天照大御神が、弟の素戔嗚尊が高天原に來ていろんな乱暴を働いたので、天の岩戸に閉じこもって謹慎されてしまいます。これも西洋的な独裁者の姿とは、全然違っていて、自分の弟が悪いことをしたら自分が責任を感じて謹慎してしまうというのは、極めて日本的な心情という感じがします。

しかし天照大御神にお出ましいただかないと、世の中が真っ暗のままということで、みんなで相談して、一つの作戦を練るのです。それがみんなで、天の岩戸の前で大騒ぎをして、天照大御神が「私が閉じ込もっていたら、世の中、真っ暗なはずなのに、なんでみんな楽しそうに大騒ぎしているのだろう」と、様子をうかがうために少し天の岩戸を開けたところを、あめのたじから天手力男命が岩戸を引き開けて、天照大御神にお出ましいただこう、というストーリーなのです。この全体の作戦を考えたのが、

あめのおもいかねのみこと天思兼命という神です。またあめのごやねのみこと天児屋命が、司会で詔を述べます。舞台を設えているのがあめのふたたまのみこと天太玉命。踊りがあめのうすめのみこと天宇売命。他にも神々が、みんな大声で歌ったり踊ったりしています。このように、大御宝による幸せの形というのは、一人一人が多様な適性を最大限に発揮して、一人も残さず、みんなが『所得』で、共同体全体のために知恵と力を合わせる。こういう姿が『古事記』の日本神話の冒頭に描かれてるわけです。ここに、一つの「仕合わせ」の形が描かれています。

最後に、廣池千九郎博士が「一生の事業」ということで、私心が打たれた一節を紹介して結びしたいと思います。

「私の一生の事業は我万世一系の国体を擁護し奉っていかうということのほか何物をも含まなかつた」(『予の過去五十七年間における皇室奉仕の事』)

このモラロジエ、道徳科学の研究ということと、『万世一系の国体』ということが、どうつながっているのか、ここが非常に重要なポイントです。『万世一系の国体』とは、皇室が三千年近く、百二十六代もずっと一系で続いてきたというだけではないと思うのです。皇室は自然現象ではありませんから、勝手に続くものではないわけです。人々が非常に苦労して、何とかお守りしてきたということなのです。それはなぜかというところ、皇室の『元元を鎮むべし』という祈りに共感した先祖たちが、それこそが、われわれの共同体の仕合わせの形だと思って、ぜ

ひ、この皇室をお守りしよう、この祈りを実現しようとする苦闘してきた姿ではないかなと考えるわけです。そうしますと、ここにわが国の道徳の根源があるわけです。

その道徳の普及と実践が、わが国の「仕合わせ」への道である。廣池千九朗博士が、『私の一生の事業は我万世一系の国体を擁護し奉つて行かう』ということは、この道徳の根源を明らかにして広めていこうと、それが、わが国の「仕合わせ」への道であるというふうに考えられたのではないかと、私は勝手に解釈しております。ということ、日本型ウェルビーイングがあるとすれば、こういう歴史の中に見つかるとは思いません。以上です。